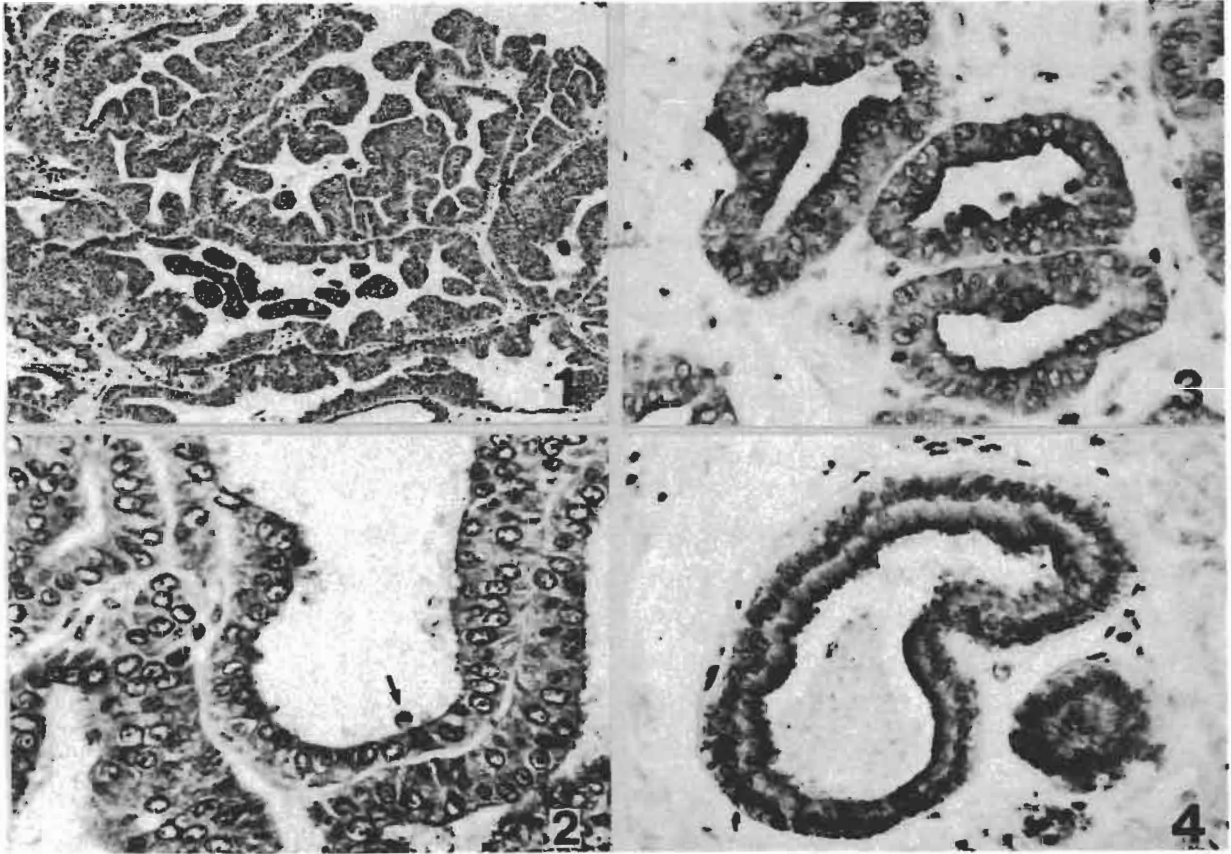


# 犬の肛門旁洞腺癌

宮崎大学農学部家畜病理学教室出題 第30回獣医病理学研修会標本No.527



動物：犬，雑種，雄，10歳。

臨床事項：本例は昭和63年4月頃より肛門周囲の腫脹が認められ，排便困難，触ると痛がるという症状で，同年7月上診した。初診時，腫瘤は肛門左側皮下に隆起し，肛門は圧迫のため正中より右側に位置していた。触診では直腸左側を中心に直腸周囲皮下組織に直径2～3cm大の数個の腫瘤が認められた。翌日外科手術により，腫瘤すべてを皮下織及び直腸から鈍性に分離して摘出。同犬は2週間後退院し約1年後，同部位に小豆大～小指頭大の数個の腫瘍再発を認めるものの元気であった。

組織所見：腫瘍細胞は主として乳頭状に増殖する形態を示し(写真1，H E，×40)，壊死像は認めなかった。また細胞自体は立方上皮様～多列上皮様と様々であったが，いずれも細胞質に比べて細胞表面の方がやや濃染しており，部分的に細胞表面に分泌物のような突起が観察され

た(写真2，H E，×400，矢印)。また核分裂像も中程度に観察された。コンカナバリンA (Con A) パラドックス染色では腫瘍細胞の細胞質，特に細胞表面は明瞭に陽性反応を示した(写真3，PA-Con A-HRP，×300)。さらにコントロールとして肛門部の5つの正常腺組織(肛門旁洞腺，肛門周囲腺，肛門腺，汗腺，直腸粘膜上皮)を同条件で染色したところ肛門旁洞腺のみが本例と非常によく似た染色性を示した(写真4，PA-Con A-HRP，×300)。

考察：H E染色での細胞表面の突起はアポクリン腺様の分泌であり，肛門付近の腺組織でこの分泌形態を示すものは肛門旁洞腺と汗腺である。この両者は正常組織形態では類似しているがCon Aパラドックス染色で汗腺は反応陰性であり区別可能である。

診断：犬の肛門旁洞腺の腺癌。